

学習者の興味に適応した言語使用場面の提示が学習意欲に及ぼす影響
—独学者が日本語オープン教育リソースに関連性を見出すための支援—

甲斐 晶子

The Effects of Providing Contextual Situations Adapted to Learners'
Interests on Learning Motivation:
Relevance-enhancing Support for Self-learners of Japanese
Using Open Educational Resources

KAI Akiko

桜美林大学

桜美林論考『言語文化研究』第9号 2018年3月

The Journal of J. F. Oberlin University

Studies in Language and Culture, The Ninth Issue, March 2018

キーワード：日本語教育, オープン教育リソース (OER), 学習支援, ARCSモデル,
動機づけ

Abstract

For self-learners learning Japanese with Open Educational Resources (OERs), keeping themselves motivated is an important issue. This research focuses on “relevance-enhancing” which is one of the motivational strategies employed by self-learners, and is to propose that a more effective OER needs to be developed for Japanese language learners studying by themselves. Initially, an analysis of existing OERs revealed that they provided uninteresting options for most learners. Consequently several items with communicative contexts for 77 language targets were developed and given to eight Japanese language learners to rate. This study demonstrates how important it is to provide contextual situations which are adapted to learners’ interests and a wide range of options in the OER for learners to select from. Doing so makes learning targets relevant to them. Several ideas are suggested for further development of OERs.

1. 序

日本語学習者は増加の一途を辿り、初学者のためのオープン教育リソース (Open Educational Resources, OER) も数多く提供されるようになってきている。近年では、強い学習動機をもたず文化への興味や交流志向から興味本位で学ぶ学習者が増えており、OERはそのような気楽に学ぶノンフォーマル学習者にとって学習参入障壁が低く選ばれやすいリソースである。個人差や学習スタイルなどを考慮した学習者中心 (Nunan 1988) の学習支援は多様化した外国語教育においても求められているが、特に青木 (2005) はOERの一つであるeラーニングについて「学習環境を個々のニーズに合わせて構築する可能性 (p.210)」を秘めているとし期待を寄せている。

強い動機づけが無い日本語OER学習者を支援するにあたっては、いかに学習意欲を継続させるかが重要な課題である。学習意欲の保持や動機づけについては数多くの研究が行われている (ジーママン1989、デシ 1985、Bandura 1971など)。中でも、関連性は動機づけの要素の中でもっとも重要な影響の一つであると言えよう。動機づけ方略を「関心 (Attention)」「関連性 (Relevance)」「自信 (Confidence)」「満足 (Satisfaction)」の4つの概念に分類して整理した「ARCSモデル」を創出したケラー (2010) は「関連性 (Relevance)」について以下のように説明している。

「関連性とは、求められている結果や考え、あるいは人を魅力的だと思ふ感情や認知であり、それはその人自身の目的・動機・価値に基づくものである。ある目的に付随する魅力が大きくなればなるほど、達成できると感じることができるときには、その行動を選択する可能性がその魅力に比例して増加する。(p.105)」

つまり、自分にとって役立つと感じるとき、学習内容と個人的な興味が一致したとき、個人的・社会的価値と合致したときなどに関連性は高まるのである。そして、関連性を想起させる方略として、ケラー (2010) は「目的指向性」「動機との一致」「親しみやすさ (経験的つながり)」を挙げている (pp.296-300)。

- ・ 目的指向性：どのようにすれば学習者の目的と教材を関連づけられるか
- ・ 動機との一致：いつどのようにすれば学習者の学習スタイルや興味と教材とを関連づけられるか
- ・ 親しみやすさ：どのようにすれば学習者の経験と教材とを結びつけることができるか

具体的な方略例としては学習者にロールモデルを紹介する手法が提案されている。努力して得られる結果を想像させることで、学習対象への期待や価値を高める手法である。状況・場面が学習者にとって身近であり、実際に遭遇しそうな場面、また学習者が理想とするコミュニケーション活動に近ければ近いほど、学習者の意欲向上が期待できる。これについては語学教育分野においても同様の主張がなされており、たとえばDornyei (2000) は学習対象を学習者にとって関連深いものにして学習の価値を高めることで動機づけが高まると言及している。

これらの先行研究を踏まえて、筆者は言語学習における「ロールモデル」とは、学習対象

を用いて表出できる談話であると捉える。すなわち、学習対象が活用できる具体的な場面・文脈を示し、「これを学ぶことで、このような状況下で、このようなことが言えるのだ」という具体例を示すことが学習への期待と価値を高めると考える。たとえ文法学習のような言語機能の学習においても、それを使う「場面」を感じ、自身との「関連性」を認識するための支援は必要であろう。特に「場面」と「興味」(Dewey 1913) との一致は、真の学習を起すために不可欠なものであるとされており、内発的動機づけの重要な要素の一つである。

しかし、既存の日本語OERは学習者が関連性を想起できるような支援がなされているのであろうか。仮にそのような支援が少ないとしたら、どのような支援ができるのであろうか。

本研究では、ARCSモデルのうちの「関連性」に焦点をあて、OERが提供している「関連性」の現状を調査し(調査1)、具体的な支援方法について検討することで(調査2)、支援方略を提案することを目的とする。多様化する日本語学習者に言語使用場面の想起を促すための支援方策について述べる。

2. 調査1：既存の日本語OERには関連性を想起させる支援があるか

2.1 目的

調査の目的は既存の主要な日本語初学者向けOERが文脈や場面を例示しているかを調べることであった。

2.2 対象

本研究では日本語学習に参入して間もない初学者について論じているため、調査対象は日本語初学者向けの文型中心のOERとした。具体的には、日本語学習ポータルサイト「NIHONGO e な」(国際交流基金 1994) にて紹介されているOERのうち、検索クエリを「文法」かつ「初級」として取り出したOERである31件から重複する3件を除外した28件について評価した。

2.3 手順

次の三つの観点について、それぞれ「有り」、「部分的に有り」、「無し」の三段階評価を行った。また、場面については同一の学習対象であっても学習者ごとの興味に適応させて異なる使用場面を例示するパーソナライズを行っていることを「個人化」とし、その有無についても調査した。

- (1) 場面(文型・機能の具体的な使用場面の例示があるか)
- (2) 解説(それぞれの文法についての説明があるか)
- (3) 練習(文法の変換練習や表出の機会があるか)

2.4 結果

結果を表1に示す。記号「○」は「有り」、記号「△」は「部分的に有り」、記号「×」は「無し」を表す。この表から見て取れるように、学習項目である「文型」の場面・談話例まで示しているサイトは半数にも満たなかった(8件/全28件)。また、談話例が示せていても、その場면을学習者個々の興味や嗜好に合わせて変えている「個人化」を実現している学習サイトは発見されなかった(0件/全28件)。

表1 既存の日本語OERレビュー

	場面	解説	練習		場面	解説	練習
教材01	×	×	○	教材17	×	○	△
教材02	○(個人化無し)	○	×	教材18	○(個人化無し)	○	○
教材03	×	○	×	教材19	×	○	○
教材04	○(個人化無し)	○	○	教材20	×	×	○
教材05	×	○	×	教材21	×	○	○
教材06	×	○	×	教材22	○(個人化無し)	○	○
教材07	×	○	×	教材23	×	×	○
教材08	○(個人化無し)	○	○	教材24	×	×	○
教材09	○(個人化無し)	○	×	教材25	×	×	○
教材10	×	○	○	教材26	重複のため除外		
教材11	×	○	○	教材27	×	×	×
教材12	×	△	○	教材28	○(個人化無し)	○	○
教材13	×	△	○	教材29	重複のため除外		
教材14	×	○	×	教材30	×	○	○
教材15	×	○	×	教材31	重複のため除外		
教材16	○(個人化無し)	○	○				

2.5 考察

調査したOERの多くは、学習項目をただ順に並べて提示しているか、決められた場面(ホワイトカラーのビジネスマンが名刺交換をする場面や女子高校生が交換留学先の同級生と懇親するなど)での会話に埋め込まれる形で提示されていた。多言語による文法解説や練習問題などの情報は充実している一方で、学習者に関連性を想起させる工夫については支援の余地があると言えよう。これは既存OERが対面授業の補講を目的として作られたものが多いことに原因があると考えられる。使用場面の紹介や文型の説明、ロールプレイなどは教室での対面授業で教員が行い、学習者ごとに必要な時間が異なるドリル練習や詳細な解説を各自のペースで学習できるようにOERにしたという背景が影響していると推測する。

独学者の学習意欲を継続させるためには、学んだ対象（文法や言い方の表現）が自分にとって身近に遭遇しうる場面・状況で活用できそうだと予期させることが肝要である。しかしながら、本調査からは、既存の日本語初学者向けOERでは場面の想起が苦手な学習者にとっては関連性が感じにくいことが明らかになった。

3. 調査2：OERに文脈を付加することで、学習者に関連性の想起を促すことができるか

3.1 目的

先行研究のレビューからは言語学習において言語使用場面の状況や文脈を例示することが関連性を想起させ、学習意欲の向上につながることを示唆された。本調査では場面の例示が実際に学習者の意欲向上に寄与するかを検証した。

3.2 対象

日本語学習歴1.9～5年の日本語学習者8名（S1～S8）を対象に調査を行った。第二外国語として初級日本語を系統立てて学習した経験を持ち、また日本語による調査についての指示を理解し日本語で書かれた調査紙に回答できる日本語運用能力を有する日本語学習者から選ばれた。

3.3 手順

調査は調査紙により行われた。まず、言語使用場面の例示文を作成するため、興味・関心分野についての調査を実施した。SNS運営企業等が効果的な広告表示をするためユーザーの興味・嗜好を分析する際に用いるアフィニティーカテゴリーの分類項目を参考に32の興味・関心分野項目を選出し、各分野への興味の程度を5件法で尋ねた。結果として、家族・恋愛・音楽鑑賞・仲間づくり・マンガ・インターネット等に高い興味を示していることが確認できた。つぎに、一般に初級前半と言われる日本語能力試験N5相当の文型・言語機能77項目について、興味の高かった分野を中心に言語使用場面を設定し、例示文を作成した。その後、文型・言語機能のみを示した77項目と使用場面を示した77項目を合わせた154項目について、「自分が初級学習者であると仮定して、このトピックの教材を勉強してみたいと思いますか。」として5件法で回答を依頼した。なお、順序効果は無作為化するため、154の評価項目は乱数表を用いて値の小さい順に提示した。表2は評価項目の一例である。IDの下三桁がOERの通し番号であり、千の位が1のものは言語使用場面の例示文、2のものは文法・言語機能のみを示している。つまり、ID1621とID2621はどちらもOER621番を説明したものである。表2では評価項目を対応ペアごとに並べて掲載しているが、評価時は無作為に並べ替えている。

3.4 結果

3.4.1 場面の想起が学習意欲にもたらす効果

まず各被験者が文型・言語機能のみを示された場合にそれぞれの項目に付した点数の平均点を第一群、言語使用場面を示された場合にそれぞれの項目に付した点数の平均点を第二群とし、Wilcoxonの順位和検定（マン・ホイットニーのU検定）を行った。検定の結果、2群間の平均値に有意差はみられなかった ($p > 0.10$)。

表2 評価項目の例

ID	評価項目	S1	S2	S3	S4	S5	S6	S7	S8
1621	もっとあの子に好きだと伝えよう。	4	1	1	3	4	5	5	2
2621	N1でN2が一番A	4	5	5	1	5	2	3	5
1622	戦闘力を比べる	2	3	1	4	4	4	5	2
2622	N1とN2とどちらがAですか、Nの方がA	3	5	5	4	5	2	1	4
1623	悲惨くらべ	3	3	3	4	3	3	3	3
2623	N1はN2よりA	4	5	5	2	5	3	3	4
1631	恋敵の進展状況を確認しよう	2	2	3	4	3	5	4	3
2631	もう・まだ	5	5	3	2	5	4	5	5
1632	飲み会の場所を提案する	5	4	5	4	4	4	3	3
2632	～はどうですか（提案）	3	4	5	3	5	3	4	5

3.4.2 関心のある場面の想起が学習意欲にもたらす効果

次に各被験者の興味・関心が高い分野での言語使用場面を示された場合のみに絞って分析を行った。作成した例示文一覧から場面を「アニメ」に関連のあるものに絞ると4の例示文が得られた（表3）。各被験者が例示文全体に付した点数の平均から、「アニメ」関連の例示文に付した点数の平均を引いた差と、興味・関心分野についての調査で全体に付した点数の平均から「アニメ」分野に付した点数の平均を引いた差（表4）との相関を調べるため、ピアソンの積率相関係数を計算した。その結果、 $1.0 \geq |r = .818| \geq 0.7$ と、両者は非常に高い相関を示した。

3.5 考察

3.4.1の結果からは、単に言語使用場面を提示するだけでは学習意欲にさほど効果を与えないことが明らかになった。例示文と解説を表示するだけでは個々の興味には対応できない。それで自身との関連性が実感できず、動機との一致や親しみやすさにつながらなかったのであろう。一方、3.4.2の結果からは、学習者にとって関心の強い分野での言語使用例を示すことで、学習意欲が強まることが示唆された。

これらの結果から、日本語学習者の学習意欲向上を促すためには、ただ場面を例示するだけでは学習意欲の向上にはつながらず、個々の学習者にとって関心の高い場面を想起させる支援が必要であることが明らかになった。

表3 「アニメ」に関連した場面例示文に付与した点数

ID	場面例示	S1	S2	S3	S4	S5	S6	S7	S8
1121	ONE PIECEの発売日を聞こう	4	3	5	4	4	1	5	5
1131	「アニソン」が何なのか聞く	3	3	3	4	4	4	2	2
1132	好きなアニメを教える	4	4	5	4	5	3	3	3
1213	フィギュアの値段を聞こう	1	5	1	3	4	4	2	2
	「アニメ」関連の点数平均	3	3.75	3.5	3.75	4.25	3	3	3
	場面例示文全体への点数平均	3.75	3.61	3.19	3.49	3.81	3.56	3.66	2.90

表4 興味・関心調査の結果

	S1	S2	S3	S4	S5	S6	S7	S8
分野「アニメ」への興味	2	3	5	4	5	3	2	5
全分野の興味平均	3.25	3.29	3.25	3.88	3.56	3.09	3.34	3.65

4. まとめと今後の展望

先行研究によれば、学習意欲を維持するためには、学習者に学習課題と自身との関連性を強く感じさせることが有効であると言われている。特に言語学習においては、言語使用場面の状況や文脈を例示することが関連性を想起させ、学習意欲の向上につながると考えられており、実際に日本語教育の現場では場面中心シラバスのテキストも多く開発されている。しかし、本研究により、日本語初学者向けOERにおいては関連性を思い起こさせる支援がそれだけでは十分ではないことが示唆された。

調査1からは主要な日本語初学者向けOERのうち、場面を例示しているものは約3割にとどまることが明らかになった。十分なメタ認知能力がなく、学習対象と自身とを関連づけ価値を見出すことが困難な学習者には場面の例示が必要であろう。調査2は予備的調査で実施した側面が強く、サンプルサイズが少ないという点で信頼性が十分とはいえない。それでも、単に既存OERに場面を示す文を加えるだけでは学習意欲の向上にはつながらず、学習者が興味・関心を高く持つ分野での使用例を提示しなければ学習意欲は高まらないことが示唆された。ケラー (2010) は「学習者の仕事や背景と関連のある具体例や比喩を提供することにより、教材や概念をなじみのあるものにする」とあるとして、課題の内容を個人的に関心のある事例や話題から選べるようにすること(個人化のオプション)を提案している。Schank (1979) もまた「動機は個人の目的、過去の経験、確立された興味

などの関連性の問題との関係がより大きい」と述べている。これらの先行研究も個々の関心に合わせて提示する場面を変える必要があることを裏付けている。場面の提示方法については引き続き研究を進めていく計画である。

場面や状況を設定したOERは複数公開されているが、本研究の結果は設定された場面・状況が個々の嗜好や関心に合っていないければ学習意欲は高まらないことを示唆している。より細かい学習者ごとの興味や必要性にいかに関与教材をフィットさせていくか、適正処遇交互作用にもとづく学習支援が必要である。たとえば商用に用いられているレコメンドーションや機械学習によるパーソナライゼーションの知見を応用し、個々の学習者の興味や関心に適合する教材を推薦することも検討できよう。また、持続可能な学びを促進するためには可搬性、活用可能性、持続可能性のある学習ポータルサイト（個別学習環境=PLE）の提供も支援方略の一つとなるであろう。ソフト面では学習者自身が関連性を見出すスキルや、学習成果を必要な場面で役立てるスキルの育成も課題である。リフレクションツールとしてのポートフォリオなどの活用も検討する価値がある。今後ますます増えるであろうOER学習者のための総合的学習環境の整備が望まれる。

付記

本研究は、甲斐(2011a)、甲斐ほか(2011b)で行った研究の一部を発展させて、その成果をまとめたものである。

謝辞

本研究はJSPS科研費 16K21342による助成を受けたものです。また、本稿の執筆にあたり、熊本大学の鈴木克明先生、松葉龍一先生、合田美子先生、愛媛大学の根本淳子先生からご助言をいただきました。心より感謝申し上げます。

参考文献

- BANDURA, A. (1971) *Social learning theory*. General Learning Press
- DEWEY, J. (1913). *Interest and effort in education*. Houghton Mifflin.
- DORNYEI, Z. (2000) Motivation in action: Towards a process-oriented conceptualisation of student motivation. *British Journal of Educational Psychology*, 70(4): 519-538
- KELLER, J. M. (1983) *Motivational design of instruction*. In C. M. Reigeluth (Ed.), *Instructional-design theories and models: An overview of their current status*. Hillsdale, Lawrence Erlbaum Associates, NJ
- NUNAN, D. (1988) *The Learner-centered Curriculum: A Study in Second Language Teaching*. Cambridge University Press, Cambridge
- SCHANK, R. C. (1979) *Interestingness: Controlling influences*. *Artificial Intelligence*, 12: 273-297

- ZIMMERMAN, B.J. (1989). *Developing Self-Fulfilling Cycles of Academic Regulation: An Analysis of Exemplary Instructional Models*. In Zimmerman, B. & Schunk, D. (Eds.), *Self-Regulated Learning from Teaching to Self-Reflective Practice*. New York: The Guilford Press. pp.1-19
- 青木久美子 (2005) 『学習スタイルの概念と理論－欧米の研究から学ぶ. メディア教育研究』, 2: 197-212
- 甲斐 晶子 (2011a) 自己調整学習能力形成を促すeラーニングコンテンツ推薦手法の提案～日本語学習者を例として～. 熊本大学大学院社会文化科学研究科2010年度提出修士論文
- 甲斐 晶子, 根本 淳子, 松葉 龍一, 鈴木 克明 (2011b) 学習者の関心・学習段階に応じた日本語学習課題推薦ツールのユーザビリティ評価. 日本教育工学会第27回全国大会発表論文集: 739-740
- ケラー, J. M. (著) (2010) 『学習意欲をデザインする－ARCSモデルによるインストラクショナルデザイン』(鈴木 克明訳). 北大路書房, 京都
- 国際交流基金関西国際センター (1994) 日本語学習ポータルサイト「NIHONGO eな」. <http://nihongo-e-na.com/> (accessed 2011.01.04)
- デシ, E. L. (著), (1985) 『自己決定の心理学：内発的動機づけの鍵概念をめぐって』(石田梅男訳). 誠信書房, 東京